

令和2年(2020年)8月8日(土曜日)

## 社説

&lt;2020.8.8&gt;

## 地域の宝に光を当てて

## 深良用水350年

神奈川県芦ノ湖の水を、箱根外輪山を掘り抜いたトンネルで裾野市深良につなぐ「深良用水」が、通水350年を迎えた。

江戸時代前期に造られたかんがい施設は今も、箱根西麓の農地約530畝を潤し、防火用水や水力発電にも利用されている。大きな崩壊もなく、生活に欠かせない重要な役割を担い、世界かんがい施設遺産にも登録されている。地域の宝に光を当て、先人の偉業を継承する取り組みに力を入れてほしい。

土木技術の高さは世界から認められている。国際かんがい排水委員会が2014年に創設した世界かんがい施設遺産は、建設から100年以上が経過し、かんがい農業の発展に貢献したり、卓越した技術で建設されたりした施設

などが対象。深良用水は第1号の一つとして登録された。

干ばつに苦しむ農民のために用水を造るまでの経緯や全長1280メートルのトンネルを掘る作業の過酷さは、これまでも伝えられている。人力で掘られた山岳トンネルとして日本最長といわれるように、土木工学的な価値が高い。高度な技術面をさらに評価して発信したい。

深良用水の完成までに延べ83万人余りが動員された。3年半の歳月をかけ、くさびやのみを使った手作業で掘り進めた。芦ノ湖側と深良側との標高差は9・8メートルで、理想に近いといわれる。両側から掘り進め、つながった地点の高低差はわずか1メートル程度。誤差ではなく、水勢を変えるために計算して段差を付けたのではという説もある。

当時の史料はほとんど残っていない

い。どんな技術でどう測量したのかわかな点も多い。

城や橋などと異なり、用水路は視覚的には価値を伝えにくい。都市化の進展とともに水田が減り、水路の暗きよ化も進み、家の前の水路を流れる水がどこから来ているのか分からない住民も増えている。

専門家も土木工学の視点からもっと評価すべきだと強調する。隧道だけでなく取水、送水、配水の技術の高さも注目してほしいと訴える。本格的な内部調査は、1950年の総合調査とその後、県の調査以外行われていないという。専門家の協力で最新機器を使った本格調査を実施し、改めて価値を検証してもいいのではないか。

裾野市などは深良用水に関する冊子の作製、市民文化センターへの展示室の設置といった価値継承の活動を続ける。350年を記念した動画配信も始めた。技術の価値をさらに分かりやすく伝える発信法も考えてほしい。